法学部

「やる気応援奨学金」リポート

Vol. 94

国際インターンシップを経験 ＩＬＯで若年層の雇用を学ぶ

法学部国際企業関係法学科三年　近藤　有里子（私立渋谷教育学園渋谷高校）

はじめに

私は国際インターンシップを履修し、とても濃い日々を過ごした。ここでは、一年の中でもメーンイベントである、スイスの国際労働機関（ＩＬＯ）でのインターンシップ期間に何をし、何を学んだかを述べる。

私がこの授業を履修しようと思ったのには三つ理由がある。まず、私はもともと貧困問題に関心があり将来は貧困の削減に携わる仕事がしたいと考えているからだ。一部の子供が朝から勉強し、同じ地球の裏では今日を生き抜くために働く子供がいるという状態を率直に「おかしい」と感じ、問題解決のために尽力したいのだ。そんな私にとって国際協力について学び、実際に国連機関にも行けるというのは将来を考えるうえで絶好の機会だったのだ。二つ目は人と違う面白い経験をしたいという好奇心からであった。国連機関でインターンなんて、望んでも簡単に出来ることではない。でもこの授業ならそれが出来る……なら、やりたい！そう強く思ったのである。三つ目は刺激的な仲間に出会いたいと思ったからだ。選考を受けてまで、この授業を履修するのは国際問題に相当興味があるからに違いない。ならば自分よりレベルが高く同じ方向性に興味を持つ仲間と過ごすことで私は刺激を受け有意義な一年を過ごすことが出来る、と考えたのだ。

決定的な力不足

選考を経て国際インターンシップの履修が決まった二月から、英語力向上のための勉強と多様な国際問題についての勉強をした。四月からの授業では貧困問題や人身売買といった国際問題について知識を深めていった。更に授業と同時並行でＩＬＯに特化した学習も四月から始まった。インターンはスイス以外の行き先としてインド・タイ・ベトナム・インドネシアがあり、授業では行き先が異なる学生が共通の問題を学ぶ。それに加え各行き先に特化したゼミも行われるのだ。ＩＬＯグループは六人おり、二人ずつペアになり問題視されている三トピック（家庭内労働、強制労働、若年層雇用）についてリサーチした。私は一人の若者として若年層雇用に興味を持ち、途上国カンボジア・中進国トルコにおけるＩＬＯと政府による若年層雇用対策とその問題点、解決策を研究した。まず前提知識としてＩＬＯの仕組み等を学び、次に効果的なプレゼン方法・調査の進め方を学んだ。そして夏休みが近付くにつれトピックに特化した学習を進めた。ＩＬＯが公表する英語文献を読みあさるのだ。どの条約と勧告がトピックの根拠となるか、実際どんな政策がなされているかを深く調べた。その中でＩＬＯの日本人職員である三宅氏と

スカイプをしたり（もちろん英語で！）関連するイベントに参加したりした。調査においてネックとなったのは問題意識を持つことだった。もちろん専門的な英語文献を読むのだから自らの英語力に落胆することは毎日だったが電子辞書があれば何とかなる。それよりも決定的な問題は、調査の進め方が分からないことであった。リサーチにおいて暗記力は不要だ。必要なのは思考力であった。文献を読んで得た知識を論理的に分析し本当にそうと言えるか、本当ならば次に私の中に浮かぶ疑問は何か等を考えながらリサーチを行う。情報のうのみでなく、批判的に考え派生した新たな疑問に従って調査していく必要があった。自ら考えながら一人の研究者として調査することは私にとって難しかった。調査をして初めて自らの批判的読解力の不足、論理的思考の欠如と、問題意識を持って自らの力で学ぶ機会がどれほど少なかったかを思い知らされた。一方的な先生の講義をノートに取り、暗記するという受け身の姿勢では全く通用しないと気付かされたのだ。私の高校では「自調自考」がモットーであった。自ら調べ、自らが主体となって学ぶという言葉の重みをこれほどまで痛感したのは初めてだった。

更なる壁と全力でのチャレンジ

自分の力不足を感じながらも八月までリサーチを深め、ついに九月私たち六人はフランスのホテルに集った。毎日このホテルからバスで国境を越えスイスのＩＬＯへ通う。バスの中でも英語・フランス語・ドイツ語などが飛び交い、ここは人種のるつぼだと実感した。リサーチはと言えば多くの情報を得たものの、どうプレゼンをまとめるかが決まっておらず本当にプレゼンが出来るか非常に不安であった。ＩＬＯにおける活動は主に三つ。ＩＬＯ職員の方へのインタビュー・インターン最終日にプレゼンテーションの発表・他の国際機関訪問である。国際機関訪問では国際連合欧州本部（Palais des Nations）・国連難民高等弁務官事務所（ＵＮＨＣＲ）・国際移住機関（ＩＯＭ）・女性のジェンダー問題を扱うＮＧＯであるSoroptimistを訪れた。

ＩＬＯ出勤日初日、私たちはスーツに身を包みバーフィールド教授引率の下ＩＬＯに到着した。到着するとすぐ三宅氏にお会い出来、ＩＬＯ内を案内していただいた。一キロもあろうかと思うほど南北に延びる長い廊下、巨大な図書館とカフェテリア、そこを飛び交う多様な言語の数には圧倒された。案内の後、私のペアは職員の方にインタビューすることになっていた。

国際連合欧州本部を見学

この時の緊張ぶりは容易に想像出来るだろう。メールのやりとりをしインタビューは一カ月も前から決まっていたが、それでも緊張を抑えられなかった。逃げ出したいと強く心の中で思っていた。相手の言ってることが分からなかったらどうしよう？質問はうまく通じるか？失礼でないインタビューが出来るか？そんなことが頭の中を駆け巡っていた。緊張しながら職員の方の研究室のドアをノックすると、彼女は笑顔で迎えてくれた。初めに日本のお土産を渡し自己紹介をして、とても和やかな雰囲気で始まった。彼女は当初の予定を延ばし一時間もインタビューとディスカッションのために時間を取ってくださった。しかし、当の私は緊張とイタリアなまりの英語が聞き取れなかったせいで、ほぼ何も話せずパートナーの友達に頼りっきり。用意した質問をすることは出来たが答えを聞き取るのに精いっぱいで批判的思考はどこへやら、彼女との議論を深めることが出来なかった。彼女の「ここまで分かる？」という質問に、分かっ

たふりをしてただ首を縦に振ることしか出来なかったのだ。「少しゆっくり話してください」と言えなかった。私はこのインタビューで本当にショックを受けた。ここまで何も出来なかった自分へのふがいなさでいっぱいだった。そして本番の発表への不安は倍に膨らんだ。だが不思議なことに今までの逃げ出したいという弱い気持ちはなくなり、最後まで全力でこれからの二週間をやりきりたいという思いが強くなった。

二日目以降も英語の文献を読みあさり職員の方にインタビューして、スライドを作っていった。多言語の環境にだいぶ慣れたのは進歩だったが、研究を深めるほど問題がだんだんと大きくて深刻なものに感じられた。と、同時に今まで気付かなかった国際機関の限界も感じた。ＩＬＯは多様な労働問題に対処するため、各国に向け条約や勧告を提示する。今まではこれを万能だと考えていたが、現実は全く異なっていた。自国内の政治的・経済的理由から条約批准を拒む国が多々あるのだ。そんな状態では国の下にいる生きた人間は人権を侵害され続ける。だがＩＬＯは何も対処出来ない。そんな事実を知り、批准しない国がある限りどんな政策も効力を発揮出来ないのではないか、強制力を持たない国際機関に実質的意味はあるのかと疑問を抱き始めた。更に私個人が、問題に取り組むにはとても小さ過ぎる存在であることを自覚した。私にはいったい何が出来るんだろう？　そんな問いが頭から離れなくなった。

目の前のことに必死に取り組んでいると、あっと言う間に二週間が過ぎていった。その間に多くの方にインタビューし、友達やバーフィールド教授と何回もプレゼン内容構成について話し合った。私たちとしては一〇〇％だと思って臨んだ前日リハーサルでさえも、バーフィールド教授に渋い顔で「スライドとスライドのつながりがクリアじゃない」と指摘された。正直むかっとしたし不安にもなったが、先生にお手本を示していただくと確かに分かりやすい。ミーティングは毎回新たな発見の連続であった。今のプレゼンでは何が分かりにくいか、どう改善すれば説得力のあるものになるかに頭を常に悩ませ一つのストーリーを作り上げていった。職員の方からもアドバイスをいただいた。このようにして半年前から始めたリサーチ活動は途中何度も心が折れて投げ出したくなったが、ついにお披露目の日を迎えることが出来たのだ。

発表は一組三〇分のプレゼンと三〇分の質疑応答・ディスカッション

発表の様子

からなる。レバノンとフィリピンの家庭内労働チームはトップバッターとして、明瞭で貫徹したプレゼンを聞かせてくれた。とてもクリアで説得力があったのだ。次のミャンマーの強制労働のチームは発表内容に緻密なリサーチが、とても良く反映されていた。強く興味をそそられるプレゼンだったのだ。私は両トピックに関し知識が乏しかったが彼女たちから多くの知識を得て、理解が非常に深まった。両チームが、半年のリサーチ成果をまとめきったプレゼンを本当にすごいと感じ、心の底から拍手を送った。二つのプレゼンが終わると、私たちはお世話になった部署NORMSのボス、ドゥンビア・ヘンリー氏と三宅氏と共にお昼を食べに出掛けた。そして午後、私たちの若年層雇用に関する発表が始まった。リサーチを深め続け、多くの方からアドバイスももらって何度もスライドを作り直し、完成したのは当日の深夜の一二時三〇分。そこからプレゼンの練習を繰り返した。発表の時緊張はしたが、決してそこにおびえはなかっ

た。今までこれだけ頑張ってきたのだから大丈夫！という確かな自負があったからだ。暗記する英語原稿は作らず、その場でアドリブも含めての発表だったため原稿の度忘れという失敗もせず、つかえることが少しあった程度で順調に三〇分を終えることが出来た。次にディスカッションする後半三〇分。答えが決まっている質問には容易に答えることができた。しかし自分と異なる視点から新たな問題が指摘され、あなたはどう思う？と聞かれた時は戸惑った。自分の意見はあったが根拠がないため、更なる調査が必要であった。私たちのリサーチの穴・次の課題を見付けることが出来たのだ。最後の質問もおわり、皆が送ってくれる拍手に包まれ発表を無事に終えることが出来た。この時の解放感と安堵感は忘れられない。そこで初めて自分でも気付かないうちに、今までいかに大きなプレッシャーを感じていたかを知った。バーフィールド教授や職員の方に“Good job!”“Well done!”と言葉を掛けていただき本当にうれしかった。解き放たれたうれしさと頑張ってきた自分に新たな自信も感じたが、「これでＩＬＯ研修は終わっちゃうんだ」という寂しさも私の中に共存していた。初めはおびえから行きたくないと思っていたＩＬＯオフィスは、二週間の間に私を成長させてくれ多くの実りある収穫をくれた思い出のオフィスになった。

多くの収穫

私はＩＬＯで多くの発見をし視野を広げることが出来た。六人が調べた三トピックに関する専門的知識はもちろんだが、問題の大きさ・複雑さと国連の限界、更に自分の小ささをも学んだ。ＩＬＯの三者構成主義から分かるように政府、雇用者と労働組合の社会対話が問題解決に重要だ。それぞれの立場から見れば、一つの事実も異なって見える。原因を一つ解決するには、三者からのアプローチ方法を考えることが必要だ。立場が違うことこそが効果的に物事を運ぶこともあるし逆に困難をもたらすこともあると知った。プレゼンにおいて三者のアプローチ方法を考えたが、三者すべてにとって等しく利益になる方法を探すことが出来なかった。異なる立場が多様な損得を持つ中で、いかに全体の損を最小限にするかが肝心で難解な点だと学んだ。ＩＬＯは三者の話し合いを設定しガイドラインを提示して、コンサルタントと監視の役割を果たす。確かにＩＬＯの活動には限界がある。けれど、ある場所で起きている「事実」を人権侵害の「問題」として顕在化させる機能、今まで振り返られもしなかった事実を取り上げ人々に「これは改善されるべき問題だ」と認識付ける機能はＩＬＯのみに与えられたものではないだろうか。国連は書類と向き合っており生身の人間と直接向き合いはしない。けれどガイドライン提示の役割を担う機関がなければ人と向き合うＮＧＯの活動を可能にしたり、多くの他機関をまとめ問題を認識付けることは出来ない。そこにＩＬＯと企業や政府、ＮＧＯなどの機関が連携することは欠かせないが……。

また躊躇したり諦めたりすることは非常にもったいない、と身をもって実感した。“You will meet your difficulties, but don't hesitate.”三宅さんに言われ、ＩＬＯでの研修を通して強く重要性を感じた言葉だ。スイスに行く前、事前にインタビューをお願いするが私は三宅氏に紹介してもらった一人の方にしかメールをしなかった。国連職員にコンタクトすることがなぜか、ためらわれたからだ。「国連職員は忙しいんだから、どうせ返信

ＩＬＯでの活動を終えスイスを観光

来ないよ」と自分に言い訳していた。だが三宅氏の言葉を聞き、私はＩＬＯに加え他機関にも積極的にメールを送りインタビューの時も積極的になることで、英語の壁を乗り越えて貴重な情報を得ることが出来た。私は二週間で六回職員の方にインタビューをしたが、シャイで礼儀正しそうに座ってただ人の言葉を聞いていた初めてのインタビューで苦い思いをした。それを反省し、次からためらわずに質問するよう意識したことで、六回目には相手の話を遮ってでも自分の意見をぶつけ質問することが出来るようになった。それにより議論を深めることが出来調査において有益な情報を大量に得ることが出来た。三宅氏の言葉をきっかけにした自分なりの変革とその成果から、積極的になる・迷ったらためらわず行動してみることがどんなに大切かを学ぶことが出来た。

更に調査の方向性を決める時もインタビューの時も自分が何を知りたいかがキーとなる。それは当たり前のことだが、目的と自分の意見を持つことは難しかった。批判的読解能力と論理的思考の欠如を感じ、相手の説明をうのみにする自分をもどかしく思うことが多々あった。知識不足は言い訳にならない。知識がなくとも考える力があれば相手の前提を疑うことは出来るからだ。当たり前を疑いクリティカルに分析をしてリサーチの穴を見付け新たな調査を行う。この無限にも思える調査の繰り返しで、問題の核心に迫り真の答えを見いだすことが出来るのだと学んだ。今回のプレゼンにおける結論の着地点は自分たちで決めた。問題は大きく複雑で簡単に解決出来るものではない。私たちは半年の調査で満足せず、問題意識を持ちどんどん答えを追い求め続けることが必要なのだ。

これらに加え、週末には歴史ある町を散策したことで人種のるつぼに身を置き、多様な文化に触れることが出来た。レストランやバスで、少し時間を過ごすだけでさまざまな言葉が飛び交っていた。こんな環境にいたことでさまざまな意見・考え・態度に接し刺激された。決してすべてに居心地の良さを感じたわけでない。けれど面白い、と心の底から思った。視野を広げ、相手を尊重し受け入れる寛容さと柔軟性を身につけられたのだ。また、自国の歴史や文化についてもっと深く学びたいと思った。

活動全体を通し実感したのは月並みだが、人の温かさとつながりの大切さだ。職員の方は皆、私たちのリサーチについて耳を傾けてくださり、どんな質問にも答えてくださってアドバイスもくださった。一学生がたった六カ月で調べた内容に仕事の時間を割いてまで真剣に話をきいてくださり、必要な資料も十分にくださったのだ。そして共にＩＬＯへ行った五人とバーフィールド教授との出会いの大切さも実感した。メンバーは仲が良く本当に楽しかった。ストレスは感じずＩＬＯから帰ると友達と一緒に御飯を作り、笑い合い、時に将来を語り合った。一日の緊張がほぐれる瞬間であった。このメンバーでなければ私は二週間をやり遂げることは出来なかった。五人と先生に出会えて本当に良かった。

おわりに

私は貧困から子供を救う仕事をすることが夢だ。今回の経験はその夢への第一歩になった。実際に国連職員の方がどのように一日を過ごすか、どんな背景を抱えているかを間近で感じられたことは進路を考えるうえで非常に有益であった。私は今回の経験で得た学びをきっかけに将来の方向性を明確にした。将来への漠然とした不安はあるが、私は夢の実現に向け今一歩ずつ歩んでいる。

このように、私は掛け替えのない経験と宝物のような思い出を得た。素晴らしい出会いもたくさんあった。共に奮闘した大切な仲間、バーフィールド教授、お世話になった職員の方々を始め、私にこのような貴重な機会を与えてくださったすべての方に感謝したい。多くの方々のおかげで、大学二年生としての夏を実り多きものに出来た。本当にありがとうございました。